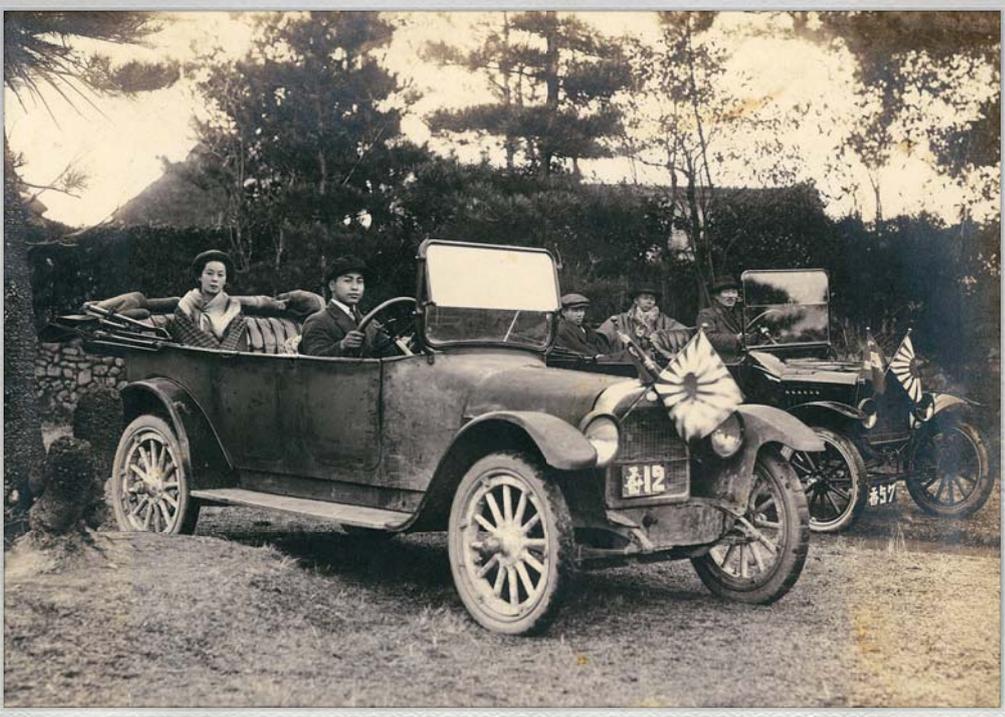




このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



懐かしの1枚

三豊自動車会社の乗合自動車 大正8(1919)年・財田町

乗合自動車とはバスのようなもので、決まった区間を決まった料金で運行した。三豊自動車会社では6人乗りのフォードを利用して、1台1,000円で購入した。

「思い出のページ」

三豊自動車会社を共同経営していた岩倉朝太郎さんの孫の岩倉朝一さん(66)は大切なアルバムを見ながら話してくれました。

その頃の戸川付近は、財田町の偉人大久保謙之丞(1849-1891)が提唱した四国新道(現在の国道32号)が開通し、人の行き来が盛んになって賑わっていたようです。山本町神田から財田町馬場に来て、米の商売をしていた、ひいじいさんの藤三郎が便利がよいということで、32号沿いに家移したそうです。その後、祖父が三豊自動車会社の経営を始めましたが、残念ながら、どこに事務所があったか、いつからいつまで運行していたかなど、資料がな

く分かっていません。しかし「この時代にはこのあたりに自動車屋がなかったんで、車のバッテリーがあがった時は、充電するために大阪まで持って行っていた」と父から聞いたことがあります。また財田町は琴平町に近いので、今も昔も買い物などは琴平へよく行くんです。伯母(父

の姉)もこの車に乗って琴平へよく出かけていたようです。歩くことと自転車主流で、タクシーもない時代のようなでした。財田町誌によると大阪で四天王と言われる程、優秀な運転技術を持っていた近藤龍吉をわざわざ雇ってきたようです。最初は戸川(財田)から琴平間で運行していましたが、路線を琴平から池田まで延長し、運賃が3円でした。また、お米30kgの価格は約7円50銭の時代でした。

編集 後記



栗島で、初めての瀬戸芸が始まります。栗島へ取材に行くたびに感じるのは島の皆さんの懐の深さ。初めてお会いしたのにそんな気がしないほど、あるがままを受け入れてもらい、ホッとします。先ごろ、笑福亭鶴瓶さんと藤井フミヤさんがテレビ番組で栗島を訪れ、「なんかずっと居たような気がする」と話されていました。まさにそのとおりです。そんな時間の中で生まれた作品たちと、島の人や風景が織りなす栗島の魅力を感じてみてください。